

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2019年4月

No. 73

～ 1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



2019年3月の報告

- 8月～3月 南アにて図書・学校菜園・サッカー・IT支援活動など国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
- 8月 東京農大派遣学生の受け入れ
- 10月 レソト王国へ本を寄贈
- 12月 TAAA帰国活動報告会
- 2月 農業塾でファーマーズマーケット開催

目次	• 現地に根付いた農業と図書事業（平林薫/スタッフ）	2
	• 大学生の現地訪問記（丸山真由/今別府英理）	6
	• 卒論:アフリカの教育（塚野悠希）	8
	• My favorite passed time is ～（高宮康次）	9
	• ぐりとぐらプロジェクト（園田理沙）	10
	• 活動日誌	11
	• 寄付金や本などを下さった方々	12



TAAA南アのスタッフ、左からシャリ、モンドリ、ナチ、ムコリシ、ボングムーサ

現地に根付いた農業と図書事業

平林 薫

2016年7月から開始となった JICA 草の根技術協力事業“有機農業塾を拠点とした農村作り”はいよいよ終盤に入った。そして、ちょうど南アでのワールドカップ開催中だった2010年7月より活動を継続しているウグ郡・ムタルメ地域での有機農業および図書活動も間もなく終了となる。

★農業塾、自立への道

有機農業塾はムタルメ小学校の敷地内の2教室を改装して活動を始めた。同小学校は丘の上の敷地に高学年、農業塾が利用している下の敷地に低学年と、道路を隔てて校舎が存在していたが、在南ア日本大使館の草の根無償協力により丘の上に3教室を建設することができた。そのため、現在は下の敷地はすべて農業塾が利用できるようになった。JICA 事業終了後、農業塾は NPC（非営利会社）として継続した活動を行うべく計画と準備を進めている。現在、農業塾内では畑作りや育苗・販売の他、ファーマーズマーケットの開催などを行っている。また、リソースセンターには図書室とパソコン・コピー機を設置して地域住民が利用しており、将来の農業塾維持・管理に向けた収入源となっている。NPC 登録後は、ウムズンベ自治区や州環境省、州農業省のプログラムへの参加や、各方面に事業提案をして資金調達に臨む予定。農業塾が自立した活動を続けて行くことは決して容易なことではないが、地域内での農業塾の役割が明確になってきたことで、今後の活動の広がりが期待される。

★農業塾の図書室

農業塾リソースセンターの図書室には放課後、近隣の学校の生徒たちが本を借りに来るが、男子生徒にはやはり漫画本が人気だ。高校生は本やインターネットで調べ物をしたり、試験勉強に来たりする。特に上のムタルメ小と隣の



ンギディ氏が育てたダイコン

ムタルメ高校にとって、学校図書室のような存在となっている。また、先日は大学生から本のリクエストがあり、ネットで注文して配備した。地域住民はコピーや印刷、履歴書作成が家の近くでできることをとても喜んでおり、コピーの質が“他の場所よりずっといい”というコメントもあった。

★東京農大の学生さんとの学び合い

昨年8月に東京農業大学の丸山さん、今別府さんが農業塾を訪問、事業参加者と交流・学び合いを行った。日本人に会う機会はほとんどない地域の若者たちにとって、同世代の彼女たちとの交流はとても貴重な体験となった。特にスタッフがうれしそうに活動を進めている姿が印象的だった。学校の生徒も訪問者があるとワクワクするものだが、まして日本のお姉さんたちから学んだことは深く印象に残ったことだろう。私たちはこれまで有機作物生産の指導に力を入れてきたが、ちょうどこの時期より上級コースとして食品加工や調理の研修会を開催し始めたところで、お2人の訪問によって食べ物の栄養価や健康的なライフスタイルについて考え、実行するきっかけとなった。丸山さんからはヨガも学び、今別府さんからは環境美化についての提案をもらったことは、スタッフや卒業生にとって大きなインパクトとなった。将来、農業塾でこのような若い人たちの交流・学び合いが継続して行われることを願っている。



ヴェリメゼ小図書室で IT 指導

★州都で農業塾の展示

9月には州都ピーターマリッツバーグで開催された“ガーデンショー”において州環境省ブース内に農業塾の展示を行った。州内全地域から企業や関係省庁、学校等がブースを出す大きなイベントで、ガーデニングに関する新しい情報入手や他地域の関係者との交流等はスタッフにとって新鮮な経験となった。9～10月には山間部卒業生を対象とした食品加工や調理等の上級コース研修会の開催や、トレーニング終了後しばらく畑作りから離れていた卒業生へのブラッシュアップ研修会などを開催した。農業塾では有機農業の重要なポイントや州農業省担当者の連絡先、マーケティングのアイデア、採種方法などを網羅した情報シートを作成し、研修会で卒業生への配布や、リソースセンターで必要に応じて地域住民に配布している。

11月初旬に JICA 東京事務所より担当の服部さんが事業の進捗調査のため訪問され、カウンターパートおよびスタッフとの会議、卒業生及び学校の活動視察等を行う中で、的確なコメントと将来への前向きなアドバイスを下さった。この時点では、事業終了後に農業塾が州環境局管轄下に置かれる可能性があり、州都ピーターマリッツバーグでの環境局ダイレクターとの会議にも出席して下さった。その後、本局からダイレクターも含めて2回の農業塾訪問とプレゼンテーションを行ったが、年明けにダイレクターが異動となり、責任者不在のため白紙に戻ってしまった。そのため、農業塾は別案であった NPC 登録をすることとなった。



ハウレン草の苗を移植する

★ファーマーズマーケット

11月末には有機野菜生産者が収穫物を持ち寄って販売するファーマーズマーケットを農業塾敷地内で開催した。初めての取り組みということで、テントを借り、音響システムも配備して地域住民に購入を呼び掛けた。事前に告知していた近隣の学校の教師たちが、“こんなに近くで安価な野菜が購入できるのはうれしい”と話していたので、私たちは“有機栽培なので味も栄養価も最高ですよ”とアピールした。隣のムタルメ高校の教師の1人は自分でも有機栽培を行いたいと、情報シートを持ち帰り、苗も購入していった。年末年始の休暇を挟んで農業塾敷地内にシェルターを

建設し、2月からはこのシェルターでファーマーズマーケットを開催している。現在は毎月5日に設定しているが、今後は月2回とし、ゆくゆくは常設にできたらと考えている。

★卒業生の発表

事業対象校では教師の退職や配置換えなどがあり、担当教師からリクエストがあったことから2月12日に農業塾で研修会を開催した。また、卒業生の活動報告や情報交換の場となるよう、2月21日にコロコロ地域の同窓会を開催した。卒業生からのリクエストで有機農業に関心のある知人同伴可にし、初めて有機農業に触れる出席者に卒業生が指導する姿も見られた。卒業生を代表してシヤボンガ・チリザさんがこれまでの自身の取り組みや現状報告をするとう出席者から大喝采があがった。チリザさんは“明け方から夕方まで働き詰めです。でも、それだけの成果があるのでやりがいがあります。成功のためにはハードワーク以外の何物もありません”と力強く話してくれた。きっと“自分も頑張ろう”と勇気づけられた卒業生がいたことと思う。農業塾内で長年にわたり畑作りを続けるンギディ氏や、農業塾をきっかけに農業従事者として躍進しているチリザさんのような人たちを実例として見聞することが何よりの学びとなる。

★小規模農家促進研修会に参加

2月26日には州環境省ザマ氏、農業指導員のボングムーサと平林の3人で、JICA主催のSHEP (SMALL HOLDER HORTICULTURE EMPOWERMENT AND PROMOTION・小規模農家へのエンパワーメントと販売促進方法) 研修会出席のため、日帰りでジョハネスバーグに赴いた。本来は2日間のプログラムで、他アフリカ諸国12カ国と南アを合わせて13カ国から参加があり、うち4カ国から発表があった。特にケニアは農業国として経験が豊富で、SHEP自体もケニアから始まったことから、取り組みの発表は具体的でわかりやすく、学ぶことが多かった。SHEPは主に各国農業省の地域担当者が“小規模農家の市場開拓・販売促進にどう関わり、対応していくか”への指南であるが、農業塾で指導員が卒業生と共に手探りでやってきた市場調査と販売は、SHEPのアプローチに沿っていると感じた。また、他アフリカ諸国と南アの農業政策や市場環境の違いが見えてきて大変興味深かった。事業終了までに他の指導員や卒業生との情報共有、今後マーケティングをどのように展開するかの話し合いのためのSHEP研修会を開催する。

有機菜園事業を開始して以来、私自身も生徒や地域の人たちと共に有機栽培方法を学び、有機作物の栄養価や安全性などの効果、食糧確保の重要性を認識しながら活動を進めてきた。そして何より自分の手で作物を育てる楽しみや収穫の喜びを実感し、有機作物のおいしさに惹かれている。自宅は“猿害”に悩まされているため主にミニリーフとハーブ栽培を行っているが、卒業生や地域の人たちにもっと生野菜を食べる習慣をつけて欲しいと思い、ハーブなど葉物野菜の栽培を促進すると共に、研修会では昼食に大きなボールいっぱいサラダを用意して“お肉の倍の量の野菜を食べましょう”としつこく話をしている。



ワイルダー小で図書委員会生徒が本の整理（中央：モンドリ）

★山間部のNPOとの協力体制

山間部対象地域のカティ高校の近くに THANDA（タンダ）という社会福祉事業（アフタースクールケア等）を行うNPO（非営利団体）がある。彼らはパーマカルチャー（生態系を考慮に入れた有機農業システム）を活動の一つに取り入れており、山間部の農業塾トレーニングコースで学んだ卒業生がタンダの指導員として働くことになったことは大変喜ばしい。他にも農業塾卒業生の菜園に水タンクの設置や収穫物の購入等、地域の有機農業の発展に寄与してくれている。NPC となる農業塾は、このような地元のNPO と協力体制を作りながら活動を進めて行き、また将来 THANDA のようにプログラムごとに指導員を配置できるようになればと願っている。

今後、農業塾は地域の有機農業普及へのトレーニングと実地訓練を中心に、リサイクルや環境美化の取り組み、伝統工芸制作や各種技術指導の場にもなるよう、カウンターパートである州環境省、州農業省と様々なプログラムを計画している。地域内にはこのような設備は他にないことから、“地域の人たちによる、地域の人たちのための”センターとなるよう、ウムズンベ自治区関係者や地区代表者へのプレゼンや協議も行っている。



インブレロ小読書促進イベントで生徒に話をするチナ・ショベさん

★図書事業、州教育省と連携・協力

図書事業に関しては2018年度の助成金申請は行わず、

TAAA 事業として主に図書委員会活動のモニタリングを行い、現在は新年度の図書委員会メンバー任命と引き継ぎの確認を行っている。2018年度は IT プログラムのみ、新規校としてヴェルメゼ小にノートパソコンとプリンターを購入、図書室に配備して基礎的操作方法の指導を行った。学年末までに29名がトレーニングを修了し、新年度からは司書教師およびトレーニングを受けた図書委員会生徒を中心にパソコンを利用、他生徒への指導を行っている。

2010年よりウグ郡の学校での図書活動支援事業を進める中で、州教育省 ELITS（教育図書情報技術サービス部門）のムベレ氏と密に連絡を取り合ってきた。事業開始前には対象学区長と共に会議を持って対象校を把握してもらい、事業開始後は相互に研修会やイベントに出席、情報交換を行い、事業終了後には各校の進捗状況の報告を行った。現在ムベレ氏は TAAA 対象校図書室への蔵書の補充や司書教師への研修を行っている。今後、ウグ郡内他地域学校への図書活動支援事業に携わる機会がある場合にも、このような連携・協力体制を継続して行きたいと考えている。

スタッフからの報告

■ボングムーサ・グメデ

私は JICA/TAAA の有機農業塾の事業に指導員として携わっている。活動開始当時は難しいこともあったが、他の指導員とのチームワークを大切に活動を行ってきた。有機農業トレーニングコースは、農業塾内でコロコロ地域の77名、山間部35名の計112名が卒業し、コース修了後に29名が就職、17名が大学に進学するなど、次のステップに進んでいる。畑作りに関しては、それぞれの状況に合った形で携わっており、農業塾での活動が地域の若者たちの目を開かせたと言える。農業塾は地域の人たち、特に若者に大きな力を与えており、活動は彼らにモチベーションを与え、目先のことばかりでなく、将来を考えるきっかけとなった。これは私自身にも当てはまる。学校や保育園、地域の人たちへの有機農業の指導も成果が見えてきており、しばしば今期の植え付けや収穫などの報告を受ける。また、家族や友人に有機農業を紹介した、という報告を受けるのはとてもうれしく、指導員としてやりがいを感じる。私は農業指導員として、アドバイザーとして、そしてプロジェクトの推進者として対象者や状況に合った形で活動を進めてきた。事業を通してネットワーク作りができ、州環境省の SEEP にも参加することで自分自身も学び、学校も独立した活動を行えるようになった。また、ジョハネスバーグでの JICA 主催の SEEP 研修会への出席は大変貴重で有意義な経験となった。地域住民の1人として、地域の多くの人たちがこの事業を大変喜んでいることを認識している。プロジェクトと言えば、何かをただで貰うとか、約束だけでちっとも始まらないとかいう風感じている人が多い中で、この事業は地域の中で確実に行われているからだ。農業塾には有機農業だけではなく、様々な情報を得るためにリソースセンターにやってくる人たちもおり、また、苗の購入に来る人も増えている。今後地域の人たちが農業塾を支えていくことを信じている。



トゥルベケ小での菜園活動

■シャリ・モコテリ

私は先行事業の学校菜園プロジェクトに参加し、学校で生徒に有機菜園作りを指導した。そして今回、トレーニングコースを通して主に地域の若者に有機農業を指導する事業に参加した。コースでは教室内での授業と実地訓練を行い、コロコロ地域および山間部で123名が卒業となった。卒業生の中には既に農業を仕事として収入を得ている人、家族が利用する目的で有機家庭菜園作りを行っている人がいる。卒業生の収穫物のマーケティングに関しても指導員は様々な取り組み、サポートを行った。地域住民グループにも農業塾やそれぞれの畑において研修会を開催、有機農業の指導を行った。現在は農業塾でファーマーズマーケットの開催も行っている。事業は地域の家庭から“飢え”を排除したと言える。農業の知識と技術を持った人たちは決して“飢え”に苦しむことはない。もしもっと多くの人々が食糧生産に携わり、日々忙しく過ごせば、きっと犯罪も少なくなるのではないかと思う。事業は小規模農家間でのネットワーク作りや情報交換の場を提供した。農業塾のトレーニングを受けたすべての人が、家族や知り合い、広く地域内の人たちに有機農業を紹介し、広めて行ってくれることを願っている。

■ムコリシ・ジュワラ

農業塾プロジェクトにスタッフとして参加した2年9カ



コロコロ地域・ワイルダー小での菜園活動

月間は、トレーニングコースや研修会、イベント等、様々な活動に携わることができた。トレーニングコースは講義と実習のバランスがよく、コロコロ地域内の主に若者を対象に5コースを行った。卒業生はコースで学んだ技術を用いて畑作りを行っており、有機農業に従事して収穫物をスーパーや地元の小売店に販売したり、家庭菜園で自家用に栽培したりしている。

また、多くの卒業生がトレーニングコースへの参加をきっかけに自信を持って様々な仕事に就いている。現在、農業塾では卒業生や地域の人たちが収穫物を持ち寄ってファーマーズマーケットを開催している。農業塾の取り組みで地域の人たちは有機農業について知り、有機作物の生産と消費を促進している。これらのことから、事業の目標である地域開発が進んでいると言えるだろう。農業塾内で開催した研修会やイベントは、地域の人たちにその存在を知ってもらうことにつながった。最近は苗の購入や図書室の利用、コピーや履歴書作成等、より多くの訪問者が見られる。事業ではスタッフへのトレーニング研修も充実していた。私たち指導員は、他の人たちに指導する前にしっかりと訓練されていなければならないからだ。特にリチャード・ヘイグ氏の研修からは、私たちの将来につながる多くを学んだ。事業では私たちスタッフができる限りの努力をし、他団体や各省庁からも支援をもらいながら活動を進めてきたことで、プロジェクトは成功だったと言える。

■ンコシナチ・ンゴボ

私自身にとってこのプロジェクトは、農業塾トレーニングコースの生徒としてスタートし、スタッフとして参加することができてとてもよかった。有機農業のトレーニングは私自身にとって大きな学びとなり、今では有機と一般の農法の違いがはっきりとわかり、健康にも意識を持つようになった。農業塾のスタッフとして、コロコロ地域内のみならず、他地域の人たちにも有機農業を促進する機会を持てた。2017年から開始した農業塾内での苗作りに携わり、苗の販売を始めたところ、販売先はどんどん広がり、現在は6地域のグループや個人、学校に苗を供給している。ウムズンベ自治区内には育苗所がないため、苗を購入した人が他の人たちに農業塾を紹介してくれている。もちろん私たちは、収穫物から種を取る方法の指導も行った。今後も農業塾で育苗を続け、これらの顧客に苗の販売をしていきたいと思っている。

■モンドリ・チリザ

農業塾は地域の人たちに多くの恩恵を与えている。特にリソースセンターは、地域住民や近隣の学校の生徒たちにとってなくてはならない存在となった。生徒たちは放課後になると図書室で本を借りたり、勉強をしたりしている。地域には公共図書館がないので、この設備はずっと続けて欲しい。事業終了後も自分にできることがあればぜひ手伝いたいと思っている。地域では多くの若者が仕事についておらず、農業塾の活動は彼らの雇用促進につながっている。有機農業のトレーニングは、うちでぶらぶらしていた若者に何かに取り組むきっかけを与えた。プロジェクトに参加して多くを学び、楽しく活動しながら地域の人たちと知識や経験を分かち合う機会を得られたことに感謝している。

大学生の現地訪問記

①栄養のワークショップをとおして

東京農業大学 4年 丸山 真由

今回の南アフリカ滞在では現地の方と共に交流することを通して農業と食に対する興味や関心をお互いに高めたいと思い参加を希望いたしました。

8月の南アフリカ滞在に向けてどのような企画をしたら現地の方にとって充実した時間になるのか春から同じ東京農業大学の今別府さんと TAAA の久我さん、大友さんと平林さんと話し合いを進め、滞在への準備をしました。そして、現地では栄養に関する知識と野菜の調理法に関する知識を持っている人が少ないということで、栄養に関するワークショップと料理のセッションを行うことが決まりました。

9日間の南アフリカの滞在では現地到着後2日目に平林さんと今後1週間の活動内容の確認と栄養ワークショップと料理のセッションの準備を行いました。

活動1日目は農業塾 MOATS を訪問しました。MOATS のスタッフに畑とリソースセンター（図書館）を案内していただきました。そこには葉物野菜から根菜まで幅広い種類の野菜が有機農業で育てられていました。また苗の保存場所も見せていただきました。どの畑もきれいに維持されており、MOATS スタッフの丁寧さが伺える畑でした。化学肥料や農薬を使わず、牛糞など自然のものを活用して行う有機農業はとても持続的であると改めて感じました。リソースセンターでは多くの本が丁寧に並べられていてとてもきれいな環境でした。また多くの子供達が訪れていて、子供達にとって重要な場所になっていると感じました。

畑とリソースセンターを案内していただいた後は MOATS のスタッフとピーマンとほうれん草の種を植えました。活動の最後には全員でヨガをしました。皆さん心からリフレッシュしていただけて良かったです。



農業塾でンギディ氏と作物について語り合う丸山さん(右)と今別府さん

2日目は小学校を訪問し、子供達に栄養のワークショップを行いました。

子供達でも理解できるように野菜を赤、黄色、オレンジ、紫、緑、白に分けて色別に野菜の栄養について紹介し、体にどんないいことがあるのか、絵を使って説明しました。子供たちも積極的に自分が好きな野菜などを教えてくれました。栄養のワークショップを通して子供達が野菜や栄養に興味を持ってくれたことを嬉しく思いました。ワークショップ後には学校の菜園を案内していただきました。そこにはじゃがいも、にんじん、たまねぎなどが育てられていました。休み時間に多くの子供が畑に来て作業をしていて、子供達の農業への興味があることを嬉しく思いました。

3日目は卒業生の Mrs Mkhize の畑を訪問しました。多くのトマトが栽培されていて、地域の人も買いに来ていました。Mrs Mkhize のように作物を地域の人たちに提供することで、経済的に有機農業を家計の足しにでき、地域の人も新鮮な野菜を手に入れることができるのはお互いに良いサイクルだと感じました。

4日目は農業塾 MOATS で栄養のワークショップと料理のセッションを行いました。

料理のセッションではにんじん、じゃがいも、たまねぎ、にんにく、トマトと現地で人気のトマトベースの鯖缶を使った野菜スープとほうれん草の卵炒めを作りました。どれも今別府さん、平林さんと一緒に現地の方が簡単に作れて、煮たり炒めたりと様々な調理法を紹介できるということで、この2つのメニューを農業塾で紹介しました。参加してくれた生徒も積極的に質問をしてくれました。また、味も気に入って下さり、私たちが紹介した料理に興味を持ってくれました。後日、調理法をまとめたレシピを渡しました。

5日目は保育園を訪問しました。保育園の菜園では子供達が水やりなどを手伝っていました。Msikazi コミュニティグループへの訪問では手作りの冊などで害獣対策を行っているのが印象的でした。そして活動最終日ということで農業塾 MOATS のスタッフと今までの活動を振り返りました。フィードバックとして MOATS のスタッフには日々の活動を記録してメンバーで共有することで、今後



の活動の計画やアクシデント起きた際に解決する助けになるのではないかとアドバイスしました。その夜には環境省のザマさんと夕食をいただき、活動の報告を行いました。

5日間の活動を終えて、帰国の前日には平林さんに滞在していたヒバディーンビーチなどを案内していただき、とても充実した滞在となりました。

今回の活動を振り返って、栄養など食に関する教育の重要性を感じました。自分の食生活を管理することは病気のリスクを減らすことに役立ちますし、訪問した地域のように大きな病院がない環境では必要なことであると感じました。また、彼らが野菜など食べ物の栄養を学ぶことは野菜や家畜を育てることにモチベーションにもなりますし、農業で生計を立てる際に、消費者に野菜の健康への効果を伝えることで多くの人が食生活や野菜など食べ物に対する意識が変わると思います。自分だけでなく多くの人が改めて自分の食や健康について考えられるいい機会になると感じました。ですから、今回の滞りで行ったように、現地の人たちが食や栄養に関する知識を得られる機会が増えると、現地の人々の生活はより良くなると感じました。

②自然とともに生きる人たち

東京農業大学 3年 今別府 映理

今回、初めて南アフリカに訪れ、また農業塾や学校、周辺コミュニティへの訪問をする機会をいただきました。

小学校や、農業塾では野菜の栄養に関するセッションを行いました。農業塾ではそれに加えて料理教室を行いました。



コロコロ地域保育園での菜園作り



トゥルベケ小で昼食を取る生徒たちと

た。栄養セッションでは、難しいビタミンなどの話を極力省いたため、とても面白かったなどの感想をいただきました。また、料理教室ではほうれん草の卵炒めと、ミネストローネを作りました。炒めるとい調理法があまりメジャーではないため、その布教と、普段手に入れやすいトマトサーディン缶に野菜を加えることで栄養を摂れるようにする、また化学調味料を使用しないという目的でありました。美味しい、レシピを知りたいなどの声が聴かれたため、これからはなるべく化学調味料を使わないで料理ができるようになれば良いと思っています。

また、私は農業大学生として、何ができるのかという思いを抱いていましたが、実際は私の方が学ぶことが多くありました。

私は農業をビジネスとして学んできましたが、農業塾スタッフや卒業生、学校菜園にかかわる生徒たちは農業をまさに生業としているのだと感じました。生きるために作物を育て、またこれから先も自然とともに生きるために土を育てている彼らを見て、非常に感動しました。農業はビジネスではなく、人と人が助け合い、生きるためのものだと思います。

小学校菜園を耕している子供はすでに農業者であり、土を悠々と耕しておりました。農具が十分ではないため、小さなスコップで畑を掘り起こし、新たな苗を植え…。

しかし、もちろんビジネスとしての農業も重要になってくるだろうと思います。農業塾では実践的な有機農業を教えています。ビジネスコースでの授業をそろそろ展開しても良い頃合いだと思います。きっとこれからも良い農業者が生まれてくるのだと思うと、非常に胸が高まる時間でした。

卒論：アフリカの教育

獨協大学外国語学部英語学科4年 塚野 悠希

私は大学の卒論で、南アフリカの教育と言語、現地の生徒たちのアイデンティティについて研究を行いました。教育関係のゼミに所属しており、もともとアフリカの貧困問題などに興味があったこともあり、卒論はアフリカの教育について調べたいと考えていました。

私はまず南アフリカの教育についての研究論文を探し、参考にしながら、アパルトヘイト時代の教育から現在の教育制度、また南アフリカで話されている言語、英語について調べました。アパルトヘイト時代の抑圧的な教育の質に驚くとともに、現在の教育制度は改善されてはいるものの、まだまだ問題点も多いことがわかりました。また11もの公用語のほかに、様々な言語の飛び交う多言語社会である南アフリカの言語状況には、日本とは全く違いとてもおもしろいと思いました。そこで私は、実際の現地の生徒さんは、今の南アフリカの教育についてどう考えているのか、また、多言語社会の中でどのようなバックグラウンドをもっているのか、教育と言語がそれぞれのアイデンティティにどのように関係しているのかという疑問をもちました。そしてそれらを実例研究として調べることにしました。

そこで自作のアンケートを作成し、それに協力していただける現地の生徒さんを探しました。現地行かずして人を集めることはかなり難しく苦労しました。そこで私はアフリカを支援している日本のボランティア団体等に一通りコンタクトをとりました。そしてご縁ありましてTAAA様を紹介していただき、一度梱包作業にお邪魔しました。皆さんあたたかく迎えてくださり、研究の趣旨を理解していただき、平林さんを紹介していただきました。そして平林さんを通して、TAAA現地スタッフの6名の方に協力していただきました。

いただいた回答はとても興味深いものでした。例えば現役の10代の学生と比べて、すでに学校を卒業された20代～30代の方たちは、南アフリカの教育や先生、教材の質などにあまり満足していない方が多かったのです。もしかしたら自分自身や家族の方たちがアパルトヘイト時代の教育を経験され、教育というものにあまりいい印象がないのかもしれないし、現地スタッフとして教育支援に関わっているからこそ考えることがあるのかもしれない。また、「自分の言葉を知らない人と話すのは怖いけど、みんなが自分を理解しようとしてくれるから、自分の言葉とカルチャーをととても誇りに思っている。」という意見や、英語と母語どちらが大切と思うかに関して他のグループの大半の人が英語と答える中、半数の3人が母語と答えていました。なぜなら「母語は自分のバックグラウンドとカルチャー、そして自分という存在を示してくれるから」「若者はローカル言語を失ってはいけない」と、多言語社会の南アフリカにおいて、言語はアイデンティティの形成に深く関わっていることがわかりました。

このように、非常に興味深い結果を得ることができ、無事卒論を書き終えることができました。これもTAAAの皆様のおかげだと思っています。本当に長い間ご協力ありがとうございました。とても貴重な経験ができました。また何らかの形で繋がることができましたら嬉しいです。



TAAAの作業場で久我代表と話す筆者（右）

My favorite passed time is ～

高宮 康次

英語を習い始めてしばらくした頃、自己紹介の表現として「My hobby is ～」の他に「My favorite passed time is ～」という言い方もあると教わりました。40年前に何か引っかかりました。微妙なニュアンスの違いは分かりませんが、日本語でも「お気に入りの時間の過ごし方は～」とは言いません。語学教材あるあるで、意味は通じるが決して使わない表現が出てくるので要注意です。と？「現代外国語教育の課題」を言いたい訳ではなく、「My favorite passed time is ～」は時間の使い方を言っていることが引っ掛かったのです。どうやって仕事をするか？アフター5に何をするか？休日をどう過ごすか？平和な現代日本では、時間をどう使うか（使わないか）は自分で決められます。もちろん、いろいろ制約はあるし、お金はないし、才能もないし、家族から相手にされていなくてもです。

人生の後半をどう過ごそうかと考え始めた時に、会社の電子掲示板で「ボランティア活動のご案内」を見かけ、その中から自宅から歩いて行けるという理由だけでTAAAに応募していました。ネットのHPには南アフリカへの支援を行っているNGOとあり、さいたまの片隅に南アフリカへの入り口が開いていることに驚きました。だってここはさいたまで、南アフリカの気配ゼロです。震災を機に日本でもボランティア活動が根付いてきたという報道は聞き流していました。必要以上に健康な身体と旺盛な好奇心は土日には活かしていません。災害ボランティア、スポーツボランティアは聞いたことがありますが、南アフリカの支援は突飛すぎて何一つ想像ができません。広大なサバンナ、野生の動物たち、聳え立つキリマンジャロ、灼熱の太陽、というステレオタイプのアフリカしか浮かんでできません。朝ごはんは何を食べて、仕事は何をして、どうやって移動して、学校はどんな建物で、どんな音楽が流行っていて、子供たちのスターは誰なのか、なーんにも知りません。

2018年8月に初めて「ぐりとぐら」プロジェクト、「本の梱包作業」に参加させていただきました。作業は私にもできる程度に軽いものでしたが、キリマンジャロのイメージとはまったく違う空間でした。しかし絵本の選定や翻訳、本の搬送のお話を伺ううちに皆さんの熱意と執念が伝わってきました。日本の絵本が、南アフリカのお母さんやお父さんからズルズルで子供に語られる。その子は大人になっても「ぐりとぐら」のことを覚えているかもしれない。初めて南アフリカのお母さんやお父さんと子どもについて少しだけ想像することができました。周辺環境は分かりませんが、そこだけはやさしい、柔らかい、善意に満ちた時間と空間があるはず。本の梱包作業は果てしない本の山と格闘しているように見えますが、この地道な作業がいつか本を読む機会に恵まれない子どもたちに繋がっていきます。作家、出版社、物流ルート、本屋さん、購買力、どれが欠けても本は読めません。一方社会インフラの整備には膨大な時間とお金が必要で、いまの子どもたちに本を届けるにはこういった支援が今必要です。HPには子どもたちの笑顔や真剣なまなざしが掲載されています。さらに多くの人の理解と支援と知恵とパワーを寄せ集めて図書館を充実させることに終わりはありません。偉そうなことを書きましたが、たかだか6回ボランティアとして参加したにすぎません。しかし皆さん肩の力を抜いて作業にあたって、とても参加しやすい雰囲気でもって迎えていただいたことに感謝しています。会社と自宅以外で、同じ時間を過ごすのであれば、わずかでも役に立つ活動ができることに喜びを感じています。月2時間だけですが、この活動は私にとってMy favorite passed time is ～と人に語れるものとなりました。

写真：後列左が筆者



「ぐりとぐらプロジェクト」キニヤルワンダ語訳 報告

JICA ボランティア (2017年度2次隊・ルワンダ・青少年活動)

園田 理沙

ルワンダで活動されている園田さんから、TAAAが絵本「ぐりとぐら」をズールー語に訳したラベルを余白に貼って、幼い子どもたちに読書の楽しさを知ってもらう活動を行なっていることを知り、ルワンダでもキニヤルワンダ語のラベルを貼って読書に親しんでほしい、という趣旨のメールをいただきました。TAAAではさっそく、小包で英語版を1冊と日本語の「ぐりとぐら」数冊をルワンダに送りました。これは園田さんからの報告です。
(TAAA事務局 野田)

<報告>

ルワンダ北西部ムサンゼ郡キモニセクターに、虐殺やDV、薬物依存やHIV等を含む暴力被害のトラウマ克服とコミュニティ再生に取り組むHealing and Rebuilding Our Communitiesという団体のオフィスがあります。今回「ぐりとぐら」の現地語訳に取り組んだのは、その一角にあるChildren's Peace Library Musanze。週末は大学に通いながら、平日は図書館司書としてこの団体で働くルワンダ人青年クウィゼラ・ジェレミー君と一緒に翻訳をしてくれました。

日本語と英語の絵本両方を使って内容の細かい説明をしながら、適切なキニヤルワンダ語に訳します。中にはルワンダでは馴染みのない食べ物や単語も登場するため、ルワンダの子ども達の身近なものに置き換えたりもしました。印刷したキニヤルワンダ語訳を、ご寄付いただいた「ぐりとぐら」の原本に貼り付け、完成。英以前まで蔵書は英語ばかりだったため、ほとんどの子ども達は絵本の挿絵を見て楽しむだけでしたが、現在は自分たちの母国語で絵本のストーリーを楽しめるようになりました。

「ぐりとぐら」の翻訳を機に、もともと図書館にあった英語の「はらぺこあおむし」の絵本も2人でキニヤルワンダ語に翻訳しました。今後ともこうして少しずつ現地語の蔵書を増やしていきたいねと話しています。



主な活動（2018年8月16日～2019年2月15日）

【日本国内】 TAAA会員とボランティア

8月～2月 本などの受け取りと作業場への搬入 北爪健一
 8月～2月 広報 報告会の準備 丸岡晶
 8月中旬～下旬 住所ラベル変更・出力 西村裕子
 8月～2月 ホームページ更新 久我祐子 渡恵美子
 8月～9月 会報72号編集・校正 野田千香子 西村 久我
 9月 会報 会報発送作業 高野千恵美 野田
 8/19 梱包作業 久我 大友深雪 野田 西村 浅見克則
 小泉信一郎 高宮康次 神村由起 鎌田聖子 山崎一恵
 神居利佳 神居裕介 熊谷雄三 熊谷翠
 9/16 梱包作業 大友 高野 西村 浅見 野田
 9/18 JICA 大学生派遣の報告会 丸山 今別府 久我 大友
 10/12 JICA 半期業務報告書提出 久我
 10/15 レソト王国大使館訪問、大使と会見 久我 野田
 10/21 作業 丸岡 久我 野田 大友 浅見 高宮
 11月 図書事業関連の申請書 作成・提出 久我
 11/7 東京農業大学 学生派遣における講演 久我
 11/9 本の種分け 大友 久我 加賀知子
 11/17 作業 野田 西村 浅見 高野 塚野悠希 高宮
 11/27 JICA ミーティング 久我 大友
 12/10 ミーティング 平林薫 久我
 12/19 外務省N連ミーティング 平林 久我
 12/16 作業・忘年会・報告会 平林 久我 大友 高野 野田
 高宮 小泉 森直之 茂任衛
 1/7 JICA ミーティング 平林 久我
 1/12 本の種分け 大友 久我 大橋温子
 1/20 梱包作業 浅見 西村 野田

【南アフリカ共和国】 平林薫と南アフリカのスタッフ

8/16 エナレニ農場で調理・食品加工・採種の研修会出席
 (JICAスタッフ、平林、農業塾卒業生9名)
 8/17～21 図書活動学校巡回モニタリング、算数セット授業、
 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、地域住民・卒
 業生および学校菜園活動モニタリングとサポート
 8/22 州環境省主催の研修会を7年生を対象に農業塾で開催
 8/23 農業塾で卒業生対象の食品加工、採種の研修会開催
 8/25～9/2 JICA事業で東京農業大学学生の丸山さん、今別
 府さんが現地を訪問。農業塾で栄養・調理の研修会開催、地域
 住民活動・対象校訪問、カウンターパートとの会議等
 9/3～7 図書活動学校巡回モニタリング、農業塾でスタッフ会
 議、敷地整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園
 活動モニタリングとサポート、ガーデン・ショー出展準備
 9/8～9 農業塾がガーデン・ショーに出展
 9/10～14 図書活動学校巡回モニタリング、州教育省へ譲渡の
 図書館バス活動モニタリング、ドゥエシユラ学区ザミサ学区長
 と会議、農業塾でスタッフおよびカウンターパートとの会議、
 敷地整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 9/17～19 図書活動学校巡回、農業塾でスタッフ会議、敷地整
 備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 9/20 ツールベケ小でドラドラ校長の定年退職送迎会出席（平
 林、モンドリ、ボングムーサ）

9/21 山間部卒業生対象の食品加工・採種研修会開催
 9/25～28 図書活動学校巡回、農業塾でスタッフ会議、敷地整
 備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 10/1～5 州教育省へ譲渡の図書館バス活動、農業塾で会議、
 敷地整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 10/8～11 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、地
 域住民・卒業生および学校菜園活動
 10/10 ドゥエシユラ学区ザミサ学区長および地区カウンセラー
 のシンガ氏と会議（平林、モンドリ）
 10/12 州教育省図書部門（ELITS）主催の読書推進イベント・
 本の寄贈セレモニーに出席（平林、モンドリ）
 10/15～17、19 図書活動学校巡回、農業塾でスタッフ会議、敷
 地整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 10/18 山間部卒業生対象の食品加工・採種研修会開催
 10/22 州農業省主催のファーマーズ・デー参加
 10/23、26 図書活動学校巡回、農業塾でスタッフ会議、敷地
 整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 10/24 州環境省本局職員が農業塾訪問、会議
 10/25 農業塾で卒業生対象ブラッシュアップ研修会開催
 10/29～11/2 図書活動学校巡回モニタリング、農業塾で会議、
 敷地整備、育苗と販売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 11/5～8 JICA東京事務所の服部さんが視察訪問。農業塾で会
 議、地域住民・卒業生及び学校活動モニタリング、州環境省本
 局で会議
 11/9、12～16 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販
 売、地域住民・卒業生および学校菜園活動
 11/19 州環境省本局ダイレクター・職員が農業塾訪問、会議
 11/20 エナレニ農場にて養鶏アドバンスコース研修会開催
 11/21～23、26 農業塾で敷地整備、育苗と販売、地域住民・
 卒業生および学校菜園活動モニタリングとサポート
 11/27 農業塾敷地内でファーマーズ・デーを開催し、地域住
 民3グループ（うち卒業生1名）が収穫物を販売
 11/28～30 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、
 地域住民・卒業生および学校菜園活動モニタリングとサポート
 12/3～1/8 日本へ一時帰国
 1/11 農業塾でスタッフ全員会議、今期の活動計画と準備。
 1/15 在南ア日本大使館草の根無償協力担当・濱田氏と共に同
 支援で校舎を建設したムタルメ小・ベキズィズウェ小を訪問
 1/14～18 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、地
 域住民・卒業生および学校菜園活動モニタリングとサポート
 1/21～25 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、地
 域住民・卒業生および学校菜園活動モニタリングとサポート
 1/29 州教育省ELITSンベレ氏と今年度の図書活動の会議
 1/28～2/1 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、育苗と販売、
 地域住民および学校菜園活動、卒業生アンケート
 2/5 農業塾内シェルターでファーマーズマーケット開催
 2/4～8 農業塾で会議、カウンターパート会議、敷地整備、育
 苗と販売、学校菜園活動、卒業生アンケート
 2/12 農業塾でコロコロ地域学校の教師対象有機農業研修会
 2/11～15 農業塾で会議。敷地整備、育苗と販売、学校菜園活
 動、卒業生アンケート、農業塾 NPC 登録作業